



＊ レポート ＊ 越冬支援活動を終えて

南海本線第三ガード下近くに、「ネルナ」とスプレーで書かれた掲示がある。「駐車禁止」「ゴミを捨てるな」「小便スルナ」などは、日本中どこにも見られるものであるが、「ネルナ」というそれを発見したときは、何とも言えない気持ちになって、しばらくそこに立ちつくしたものだ。これは

仕事にあふれ、青カンを余儀なくされた日雇労働者に向けられたものであるが、こんな言葉はおそらく釜ヶ崎独特のものである。越冬も同様である。冬を越すというごくあたり前のことを、ことさら取り上げざるを得ないところに釜ヶ崎の特徴がある。いく重にも構造化された日本経済は、あた

かもトカゲが自分のしっぽを切って生き延びるように、いつも末尾を切り捨てることによって安泰を図ってきた。そのしっぽの先端に置かれたのが日雇労働者なのだ。釜ヶ崎は日本経済のパロメーターだといわれるように、ちょっととした景気の変動は、すぐに釜ヶ崎の日雇労働者に響いてくる。それから下請けなどの零細企業、中小企業と続き、大企業や親方日の丸の公務員などは、どんな不況下にあってもビクともしないように日本の経済機構はなっている。逆にいえば、日本経済の最底辺を支えているのが日雇労働者であるのに、踏みつけている側が「ぼりとポーン」を貰い、ぬくぬくと一家だんらんを楽しむ時期が、釜ヶ崎の日雇労働者にとっては生きるか死ぬかのたまたかの季節なのだ。

今回は三回目になる。一九七五年度は、釜ヶ崎協友会(釜ヶ崎で奉仕活動をしている七団体で構成)が、大阪市の無料臨時宿泊所の管理を引き受けた。一九七六年度からは、関西キリスト教都市産業問題協議会(KUIM・関西で活動するグループ二十余で組織)も加わり、独自の活動として、炊き出し、夜間パトロールなどを行ってきた。今回は協友会、KUIM、釜ヶ崎地域問題研究会(若い労働者とキリスト者で組織)が「キリスト教釜ヶ崎越冬委員会」を組織し、12月26日と2月28日まで、次のような諸活動を中心として越冬支援を行った。

- 一、夜間医療パトロール
- 二、炊き出しへの支援カンパ
- 三、行政への要望書提出

正式にはキリスト教越冬委員会から詳細な「報告書」が出されるので、ここではポイントだけをお伝えしておきたい。

●越冬日録

▼11月22日 キリスト教釜ヶ崎越冬委員会 大阪市に対して要望書提出。回答11月末。

▼11月29日 全国二千余の教会学校などに第一回目の支援要請発送。

▼11月30日 11月末日だが、大阪市から何の連絡もない。大阪府は11月末から12月にかけて、釜ヶ崎内の四公園中の三公園(花園、仏現寺、海道)を1月31日まで改良工事を理由に全面閉鎖。

▼12月12日 釜ヶ崎越冬闘争連帯集会(部落解放センター)。連帯集会実行委員会からの要請により、スライド「釜ヶ崎一九七六年冬」をうつし、またキリスト教越冬会からもあいさつ。集会後、参加者による釜ヶ崎実態調査(参加者二五〇人)。

▼12月13日 大阪市 海道公園のフェンスを張り終え、公園の門に鍵をかける。キリスト教越冬委

代表(七人) 大阪市民生局生活係と会うが、要望書の回答は一つ出さなかった。越冬闘争実行委、7時から夜間医療パトロールをはじめ。

▼12月24日 三角公園で第8回越冬闘争決起集会開かれる。支援の参加者多数。なお12月23日と2月24日まで毎金曜日午後7時～9時、計10回、越冬支援連絡会議がもたれた。

▼12月25日 第8回越冬闘争はじまる。炊き出し 前9時、後1時、7時の三回。医療券の発行 前9時(市民館前)。医療パトロール 7時30分、11時の二回(応急、救急、スリーブ配り等)。日刊「えっとう」紙の発行。医療センター前の布団敷き(後9時)。

▼12月26日 キリスト教越冬委 今日から2月末まで支援体制にはいる。とくに医療パトロール、病院訪問に力点をおく。キリスト教越冬委は以後、毎火曜日午後9時～10時半まで打合会を開く。

▼12月29日 今日と30日の二日間、市立更生相談所で無料臨時宿泊所の受け付けがあった。公募では千人だが、実際は千二百人。主として南港埋立地のプレハブに入る。しかし、青カンは相変わらず、テレビ毎日、ドキュメントのため取材を続ける。

▼1月1日 1日～3日まで、キリスト教越冬委主催で「越冬セミナー」を開く。テーマは「釜ヶ崎とわたし」(希望の家)。参加者延べ八四人。1日「釜ヶ崎とは何か」、2日「日本の差別構造」3日「今後の課題」。

▼1月3日 もちつき大会(三角公園)前10時～3時。青カニ二人で最高。

▼1月7日 キリスト教越冬委による週一回の病院訪問はじまる。

▼1月10日 今日で臨時宿泊所終る。

▼1月13日 越冬闘争中間連絡集会(市民館)。越冬実 中間資料を出す。

▼1月16日 横浜寿町では、越冬闘争弾圧に対する反響集会。名古屋では駅前炊き出しに対して弾圧が強まる。

▼1月18日 NCC部落問題委員会の有志が、パトロールに参加。水炊場の大掃除があり、集っていた人たちは第二ガードに追われる。

▼1月23日 1月20日、萩之茶屋住宅前で倒れていた人は、救急車で運ばれて2時間後に大和中央病院で死んだことが、訪問でわかる。

▼1月26日 地域研「釜だより」第一三号、越冬中を徹夜で印刷。センター前で、三〇才ぐらいの身元不詳の男死亡。

▼1月29日 越冬中間報告会(聖公会聖ヤコブ教会)。五〇人参加。同夜11時45分～12時15分、テレビ毎日のテレビポルタージューで「越冬：釜ヶ崎日雇労働組合」を放映。

▼1月31日 越冬中間報告の発送。約二三〇〇通。

▼2月2日 後2〜3時、仏現寺公園附近で行路病死者発見。

▼2月4日 パトロール中に26号線ガード付近で、ダンボール箱の中で死んでいる人を発見。朝日毎日などのマスコミに連絡。2月6日の朝日に記事が出る。

▼2月7日 KUIIM例会(喜望の家)。協友会の働き、越冬について報告。参加者パトロールにも参加。

▼2月14日 最近、西成署による炊き出し前後の弾圧が激しくなる。

▼2月19日 行路病死あいつぐ。西成の日雇労働者の「死」を小山珠夫氏(三〇才)が、朝日の「声」欄に投稿。

▼2月20日 また市民館前行路死出る。夜、テレビ朝日、1月17日撮影のフィルムを「タイムシックス」で放映。

▼2月22日 青カン突態調査(医療センター前)。一七人に面接。引き続き、23日も行方。

▼2月23日 昨年の四・七執行の大阪市相手の裁判(損賠)の第四回公判。

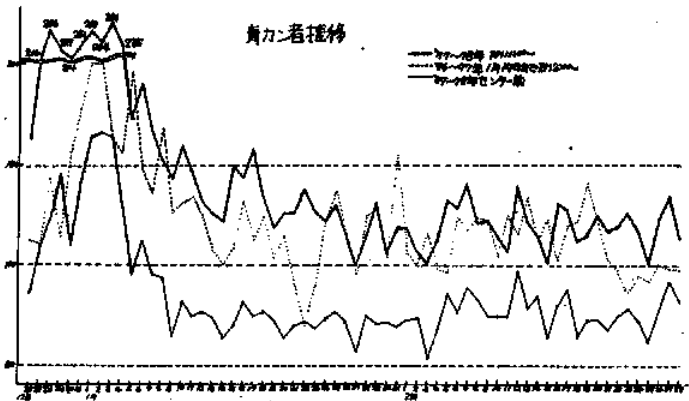
▼2月25日 今朝また第二ガードで行路病死発見。

▼2月27日 越冬突・釜日労は三里塚支援に出席し、パトロールはキリスト教越冬委のみ。

▼2月28日 越冬闘争は終るが問題は山積している。「終った」という実感なしと「日誌」にある。

●主な数字

へ夜間医療パトロール(6頁)にあるコースを午前11時から約二時間パトロールした。青カン者総数は九三八五人で一日平均一四四人であった。うち医療センター軒下に敷いた布団の中に保護した総数は五五三五人で、一日平均八五人だった。とくに今年公園が閉鎖されたので、拠点がなく、労働者のパトロール参加が困難であった。それでもキリスト教越冬委関係のパトロール参加者総数は七八一人



委は、三〇〇万円を目標に全国に支援カンペを呼びかけ、心ある人たちから五〇〇万円が寄せられ、炊き出しに一〇〇万円支援することができた。

へ医療券発行へ医療センターの好意により毎日9時、医療券を発行したが、総発行数は三〇三枚で、うち有効被発行者数は二三八人であった。一日平均発行者数五二人になる。疾病を分類すると、釜ヶ崎病といわれる肝機能障害が二四八人(一七%)で、次いで結核一六三人(一三%)、腰痛・関節症一三四人(九%)、消化器疾患一三二人(八%)、高血圧一〇九人(七%)となっている。じつに四人に一人が肝障害、五二人に一人が結核となっている。また、越冬期間中三〇人入院した中で二三人が各地の病院に入院している。今後はこの人たちのアフターケアという大きな課題が残っている。越冬は終ってはいない。(信)

夜間医療パトロールに参加して

犬飼 誠

釜ヶ崎について、私たちはどんな印象を持っているでしょうか。大阪に住んでいる私などはかつて現状を知らず、偏見に満ちて釜ヶ崎を見ていました。たとえば、釜ヶ崎へ普通の人間が行ったりしたら半殺しの目に会う、などということを本気で信じていたのです。こういうことは誤解です。私は夜間医療パトロールに今回初めて参加して、釜ヶ崎の真の姿を見ることができました。ここにそこでの体験を書き、多くの人に少しでも釜ヶ崎に目を向けていただきたいと思います。

釜ヶ崎における体験を書く前に社会問題として釜ヶ崎があるとい

うことを認識していただきたいと思えます。それは行政の立ち遅れから生じる複雑な地域問題なのです。私自身まだ理解が浅く、そのことについて、ここで詳しく解説できないのを残念ですが、行政側は釜ヶ崎から起る問題を治安問題として扱うようです。

パトロールには一週間ほどの参加でしたが、見たこと感じたこと全部書けば、おそらく原稿用紙が百枚あっても足りないと思えるほどです。行政側が無理解であるとわかるのは、労働者の寝ている所にテレビカメラがすえてあったり、公園がロックアウトされていたりしたことです。

私は労働者とよく話をしながらパトロールしました。彼らは自分の昔話、行政に対する不満、酒からなかなか抜け出せないで苦しんでいることなどを話し、キリストのことを教えてくれと言ってきたりしました。いろんな人がいますが、皆いい人たちだったと思えます。彼らは少し粗野な所がありますが、単純・素朴な気持のいい人たちで、人と話をしたいと思ったりするのは、淋しいからなのです。そして最近の大学生なんかよりずっと礼儀正しかったように思います。言葉使いがきれいで、お礼を本心に丁寧に言っていました。私が最後にパトロールに参加した日の労働者との会話を実際に書いておきます。

「おっちゃん、パトロールして疲れへんかったか?」
「いえ、そんなことないですよ」
「今日は、青カン少なかったな」
「だいぶ暖かくなってきたからでしょう」

「ほな、今日はこれで僕ら帰るわ。おっちゃん、酒ひかえなあかんで。氣をつけてドヤに帰りや」
「ありがとうございます。おれみたいな飲んだくれの話相手になつて下さって、ありがとうございます」
「いや僕のほうこそいろんな話ありがとう」
「ありがとうございます。それじゃおやすみなさいませ」

この人は特にきれいな言葉で、釜ヶ崎の労働者はたいがいそうなんです。釜ヶ崎の人も地方から出てきて、釜ヶ崎から抜け出れずにいる人で、どこ出身か、標準語に近い言葉で話していました。

パトロールでもっとも手間取る場所は、三角公園でした。この公園だけはロックアウトされておらず、労働者も自由に使える場所です。労働者はその公園で夜の寒さをしのぐためにたき火をします。泊る金がなくてそうしている人が大半ですが、一人ドヤで寝るより

仲間と夜を過ごしたい、という理由の人もいました。

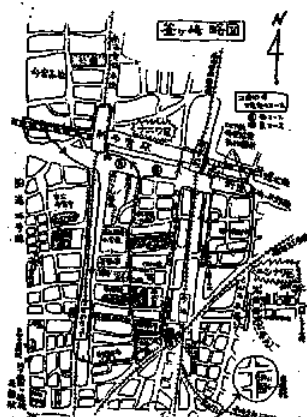
酒に酔いつぶれてか、火のそばでひっくり返って寝ている人がいます。そういう人は、放ったらかしているのと凍死するかも知れず、リヤカーに乗せて医療センターの軒下に敷いてある布団の中に保護します。

またけが人や病人もいます。なぜけが人がいるかといいますと、昼間の労働で傷ついた人もいますが、シノギヤと呼ばれる路上強盗に襲われた人もいます。治療できる人はその場で治療しましたが、時には救急車を呼ばなければならぬ場合がありました。しかし病院をさらう人が多いようです。ある病院などは労働者をまともに手当てしないようで、その病院だけには送らないでくれと頼む人もいました。

私は釜ヶ崎についてだんだん分かってきた、慣れてくるにつれてこの町に愛着のようなものを感じ

てきています。そして人を助けるということは、本当は自分が救われることだということを知りました。最初は、好奇心のようなつもりで夜間医療パトロールに参加しましたが、今では本人から隣人愛だといえます。

ここにあげたのは、ほんの一部で、まだまだ私が肌で感じた釜ヶ崎の体臭といったものが十分出せないのが残念です。夜間医療パトロールは今でも毎月曜日十一時頃から行われています。多くの人がここに参加して実態を知っていただし、釜ヶ崎の問題がそのバックアップで解決されることを望んでやみません。



〈創作〉

二度死んだ男の話(中)

嵯峨 明

安男が人目に立つのを恐れて、作業服一枚きたきりで、家を出たのは菜の花の美しい季節であった。大阪へ出れば何んとかなる、そう思って電車にのった。大阪へ着いたのは夜だった。その夜は附近の安宿にとまった。

明くる日、宿を出しなに、宿の主人にどこか働く所はないだろうかと尋ねてみた。主人は安男の顔と服装をみくらべながらいった。「突然よそからきて仕事を探しはっても、そう簡単にはみつかりません。いっそ釜ヶ崎へいってみてはたらいたら、その日からでも仕事口はたんとありませ。ええ、釜ヶ崎はな、ここから地下鉄にのって動物園前で降りたらじきにわ

かりますわ」

地下鉄を出て、動物園と反対の方向に大通りを行くと、すぐに路面電車の踏み切りがある。それを越えて少し歩いて大通りを向う側に渡ると、もうそこは釜ヶ崎地区になる。

時折新聞記事や人の口から聞いて知ってはいたが、現実に安男の目の前にある釜ヶ崎は彼の思いの外にあった。

そこへ一歩足を踏み入れた時、何んとなく異様な雰囲気を感じ、倒すようにせまってきた。朝もいっても八時をすぎているのに、作業服をきた男達が、道路のいたる所に三人、五人とかたまって立ったり座ったりしているのが目に